

佛蘭西書巡覧 27

平山 弓月

きわめて自由な形で生まれてきた人間が、その自由をりっぱに用いて、人間の本質というものを確立しなければならない、というのが実存主義的文学の根底にある生きる態度のように思われます。

【増補フランス文学案内】



前稿でも触れましたが、第二次世界大戦直後の、進むべき方向を模索し、激動する世にあって、カミュとサルトルJean-Paul Sartre(1905-1980)とは《戦後》の文学・思想界をけん引する指導的立場にいました。そこで本稿ではサルトルについて少し考えてみましょう。

カミュと違って、作家は知的なブルジョワ家庭に生まれました。しかし海軍士官であった父とは、生まれてすぐに死別し、出自がアルザスである母方の祖父とともに暮らすこととなります。アフリカ、ランバレネの地で住民の医療に尽くした、シュヴァイツァー博士とは親戚関係にあります。

母の再婚によって一時パリを離れた作家は、フロベールの作品を核に、文学に親しみ、「知的な伝統」を身に付けました。高等師範学校École Normale Supérieure入学で、旧友のニザンPaul Nizan(1905-1940)と再会します。このころのサルトルは、ブルーストやシュールリアリストから影響を受けたと、自ら回想しています。

哲学教授資格を得、高等学校で教鞭をとったのち、ベルリンで「現象学」および「実存主義」哲学を研究します。パリにもどった彼は、1938年に小説『嘔吐』la Nauséeを発表し認められるようになりました。

動員された第二次世界大戦では捕虜となりますが脱走しパリに戻り、高等学校で教え、レジスタンス運動にも参加しつつ、1943年に戯曲『蠅』les Mouches、さらには哲学論文『存在と無』l'Être et Néantを相次いで発表し、耳目を集める文筆家という地位を確立しました。サルトルは、未完に終わったとはいえ、1945年から長編小説『自由への道』les Chemins de la libertéを発表し、冷戦下の世界で若者たちの知的指導者となりました。そのうえ、彼は従来の文学者の殻を打ち破り、社会に対峙する知識人という概念を創り出しました。フランスが直面していた、インドシナ戦争、アルジェリア独立戦争、さらにはベトナム戦争に対し、左翼的立場に立ちながら、文学と政治との密接な関係を体現したのです。

サルトルの思想を理解するには、もう一つの哲

学論文『弁証法的理性批判』Critique de la raison dialectique, 1960をも視野に入れ、彼のいう「実存主義」l'existentialismeについてお話すべくですが、それは筆者の手に余る哲学的問題です。ここでは文学的源泉を伝える自伝的作品『言葉』les Mots, 1964を紹介しましょう。

私が『ミッシェル・ストロゴフ』を読んだのはちょうどそのころ、つまり、一九二二年か一三年だった。何という模範的な生涯だろうと思い、嬉し泣きをした。真価を示すためにこの騎士は、山賊の気まぐれを待つ必要はなかった。上からの命令が彼を闇からひきだし、彼はそれに服従するために生き、勝利によって死んだ。なぜなら、彼の栄光こそ死であったからだ。(白井浩司・永井旦訳)

祖父の書庫はサルトルにとっては宝の山でした。本の香りに包まれて、「驚くべき利発さ」をみせました。「読む」ことが、彼の想像力を涵養したのです。

作品として描かれた世界も、私を不安にした。ときどき、子供向きの手ぬるい殺戮に飽き足らず、筆のおもむくままに書き進めてゆくうち、私は、身の毛のよだつような可能性、私の至上権の裏面にほかならぬ恐るべき世界を発見して、胸が締め付けられた。(白井・永井訳)

「書く」こと、つまり言葉による表現との幸せな邂逅が、作家としてのサルトルの源泉であったのでしょうか。しかしこの言語表現に対する信頼は、のちに揺るぐことになってしまうのです。大作評論『聖ジュネ、演技者と殉教者』Saint Genet, comédien et martyr(1952)はサルトルの転換点となった重要な作品であると評されています。サルトルの文学世界には哲学的で難解な作品が多く溢れていますが、指針を失った現代、今一度読み直して欲しい作家です。

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)